青砥藤綱像の形成

――『太平記評判秘伝理尽鈔』と『北条九代記』の解釈を中心に――

Csendom Andrea（チェンドム アンドレア）

はじめに

『太平記』の小さな逸話から生まれた青砥左衛門藤綱像は近世初期に変容し、近世中期までには伝播し、近世を通じてそのイメージが固定化された。近世後期にはその人気が増し、次々と有名なヒット作が誕生した(1)。さらに、その後も人気を失わず、明治期に再生し(2)、昭和期までにたびたび舞台や小説などで登場し(3)、教訓性を内包している人物像として定着していった。藤綱像が、このように長い時間を経て形成されて、時代ごとの作者に取り上げられることは、藤綱像の受け入れやすさを示すとともに、藤綱像がそれぞれの時代のある側面を物語っているといえるであろう。

文学作品における藤綱の描写は、これまでも少なからぬ研究者の関心を引いてきた(4)が、時代ごとの藤綱像の変遷をその原型から最盛期まで、丹念に追究した研究は行われてなかった(5)。そんななかで注目されるのは、近年の井上泰至氏の研究である。井上氏は、『北条九代記』の藤綱像(6)と、井原西鶴が『武家義理物語』で描く藤綱像を、『太平記評判秘伝理尽鈔』の藤綱像と比較しつつ考察した(7)。その結果、一七世紀における藤綱像は、倹約と結び付けられ、新しく定着する武士モラルの流布の過程で重要な役割を果たしていたと結論付けている。この井上氏の研究は、画期的である。しかしながら、藤綱像が時代のなかでどのように形成されてきたのか、という

観点がいまだ希薄なようにみえる。もともとの『太平記』の藤綱像がどのようなものであるか。それを踏まえて『理尽鈔』がいかに改変していったのか。さらに『北条九代記』は、先行のものを踏まえつつ、どのような藤綱像を作り上げていったのか。このような形成史的視点から、藤綱像の形成のプロセスを丹念に解明していくことがいま必要だと思う。

筆者のもともとの関心は、一八世紀末の寛政期の黄表紙にあり、黄表紙がいかに読まれたかを考えることにあった。実は黄表紙のなかに、藤綱を主人公とするものがいくつもあった。その藤綱像がどのようなものであり、それが先行の藤綱像とどのような関係にあるのかを解明する必要に迫られて、一八世紀末までの藤綱像の変遷を具体的に検討することになったのである[8]。本論文では、藤綱像はいかなるものだったのか、まず『太平記』の分析から始めよう。

一　『太平記』の原型と思想構成

青砥左衛門が登場するのは、『太平記』の第三十五巻の「北野通夜物語事付青砥左衛門事」[9]である。実は、『太平記』には「藤綱」という呼称は出てこず、青砥左衛門と称している。「青砥左衛門尉藤綱」の名が出てくるのは後述の『太平記評判秘伝理尽鈔』である。では、本論文では、『太平記』を扱う本節では青砥左衛門、次節以降は藤綱という名前で取り上げる。

さて、『太平記』の「北野通夜物語」には、北野に通夜する遁世者、雲客、法師の三人による、混沌とした時勢を批評する対話が描かれている。一人一人が幾つかの逸話を解釈し、意見交換する中で、坂東声の遁世者が、なぜ世の中が混乱に陥り乱世が続くのかを論じる際に、西明寺時頼が諸国を救い、最勝園寺入道貞時も同様にしたという話を引く。その後に取り上げたのが、青砥左衛門の逸話である。それによれば、青砥左衛門は、報光寺（鎌倉幕府の第八代執権、北条時宗《在職　建長三（一二五一）年～弘安七（一二八四）年》）と最勝園寺（鎌倉幕府の第九代執権、北条貞時《在職　弘安七（一二八四）年～正安（一三〇一）年》）に仕えた者として紹介される。しかしながら、以後の逸話では、鎌倉幕府第五代執権、北条時頼（正五位下、相州、また出家後は西明寺殿、西

明寺入道とも、在職　寛元四《一二四六》年～康元元年《一二五六》年）の忠臣として描かれ、時頼を補佐したという。

『太平記』は、青砥左衛門をまず質素な人物だと描写する。

數十箇所ノ所領ヲ知行シテ、財寶豊ナリケレ共、衣裳ニハ細布ノ直垂、布ノ大口、飯ノ采ニハ焼タル鹽、干タル魚一ッヨリ外ハセザリケリ。（『太平記』[10]）

青砥左衛門がこのように質素な生活を送るのは、彼自身の価値観と大きく関わっている。『太平記』は、

加様我身ノ為ニハ、聊モ過差ナル事ヲセズシテ、公　方事ニハ千金萬玉ヲモ不レ惜。（同前）

とする。また次の部分では、自分の為には一銭も使用しないが、民のためには千万も惜しまないという公平な態度だけではなく、それ以上の善良な性格が描写されている。

又飢タル乞食、疲レタル訴訟人ナドヲ見テハ、分ニ随ヒ品ニ依テ、米錢絹布ノ類ヲ與ヘケレバ、佛菩薩ノ悲願ニ均キ慈悲ニテゾ在ケル。（同前）

青砥左衛門像に最初から内包されているこの思想は、仏の慈悲に等しいという当時の感覚では最上級の賞賛だといえよう。中世では佐藤弘夫氏も指摘するように仏教思想が正統な役割を果たしていた[11]。以後の青砥左衛門の逸話も仏教的背景を前提として構成される。ところで、『太平記』は青砥左衛門の慈悲の深さを仏になぞらえて表現しているが、質素な生活などは仏教的価値観だけに限定せず、儒学に基づく政治的な側面を補って描いている。

右のように仏教的価値観を背景としながら、青砥左衛門の政治的な活躍の描写には儒学的な思想が取り入れられる。以後のエピソードにおいては、大きく分けて青砥左衛門に関する三つの逸話が描写されている。第一に公正な裁判を行う逸話、第二に滑川の逸話、第三に時頼夢想の事の逸話である。第一の裁判の逸話は次のように展

開される。

或時徳宗領ニ沙汰出来テ、地下ノ公文ト、相模守ト訴陣ニ番事アリ。理非懸隔シテ、公文申処道理ナリケレ共、奉行・頭人・評定衆、皆徳宗領ニ憚テ、公文ヲ負シケル（同前）

徳宗とは鎌倉幕府の執権である北条氏の惣領であるが、この徳宗領の荘官が不正に気付き訴訟した。だが裁判では、奉行役人はみな徳宗の権勢を恐れ、荘官の申入れを却下した。このことを聞いた青砥左衛門は驚くべき行為に出る。

青砥左衛門只一人、権門ニモ不レ恐、理ノ当ル処ヲ具ニ申立テ、遂ニ相模守ヲゾ負シケル。（同前）

右に引用した通り、青砥左衛門は、一人だけ声を上げて、荘官の所帯に安堵をもたらしただけでなく、そのことによって時頼を敗訴とした。それを恩に感じた荘官は、青砥左衛門に、引出物として三百貫の銭を俵に積み彼の敷地内に密かに置いた。しかし、それを見た青砥左衛門は大いに怒り、次のように言った。

「沙汰ノ理非ヲ申ツルハ相模殿ヲ奉レ思故也。全地下ノ公文ヲ引ニ非ズ。若引出物ヲ取ベクハ、上ノ御悪名ヲ申留ヌレバ、相模殿ヨリコソ、悦ヲバシ給フベケレ。沙汰ニ勝タル公文ガ、引出物ヲスベキ様ナシ。」トテ一銭ヲモ遂ニ不レ用、迥ニ遠キ田舎マデ持送セテゾ返シケル。（同前）

青砥左衛門は、「裁判において理非を明らかにしたのは、時頼殿のために行ったことであった。あなたのために行ったことではない。引出物を出すのであれば時頼殿こそ出すべきだ」と言った。そして彼は銭を一銭も残らず返した。

裁判のこの逸話では、青砥左衛門像に関して二つの重要な指摘をすることができる。まず第一に、理非を分かって公正に裁判を行い、さらにそれは相州のためになると述べていることから、青砥左衛門が正直な武士として描かれている点である。第二に、道義に反する金銀はも

ちろん、贈り物さえ受けない清廉潔白な性格を持っていることである。

第二の逸話は、最も有名というべき滑川の逸話である。ある夜、青砥左衛門は勤めに出る時に、いつも持ち運んでいる火打ち袋に入れた銭から十銭を水中に落としてしまう。少ない金銭なので、他の人なら拾わずに過ぎ去ってしまうところである。だが、青砥左衛門は、

以外ニ周章テ、其邊ノ町屋へ人ヲ走ラカシ、錢五十文ヲ以テ續松ヲ十把買テ下、是ヲ燃シテ遂に十文ノ錢ヲゾ求得タリケル。（同前）

松明を五十文で買って十文の銭を探させたという。ところで、

後日ニ是ヲ聞テ、「十文ノ錢ヲ求メントテ、五十ニテ續松ヲ買テ燃シタルハ、小利大損哉。」ト笑ケレバ（同前）

右のように、その行動を「小利大損」とからかわれた青砥左衛門は眉をひそめながら、次のように述べた。

「サレバコソ御邊達ハ愚ニテ、世ノ費ヲモ不レ知、民ヲ慧ム心ナキ人ナレ。錢十文ハ只今不レ求ハ滑河ノ底ニ沈テ永ク失ヌベシ。某ガ續松ヲ買セシル五十ノ錢ハ商人ノ家ノ止々（ッ）テ永不レ可レ失。我損ハ商人ノ利也。彼ト我ト何ノ差別カアレ。彼此六十ノ錢一ヲモ不レ失、豈天下ノ利ニ非ズヤ。」ト（同前）

青砥左衛門は眉をひそめて、十文を探さなければただ失うだけであると述べた。それを探すために五十文で松明を買って、雇った商人が銭を得たことで、その金銭はこの辺に流通し、この地域の繁栄になるのだ。商人の利は天下の利と繋がることであるので、私の意図を理解できない人は愚かだと言い残した。つまり、青砥左衛門が五十銭を使用したことは天下の利になるためだ、という重要な意味が読み取れる。

しかし、この逸話は青砥左衛門の賢明な発言で終わらないことに留意しておきたい。最後に、周囲の人々の恥ずかしがる反応が描かれる。

爪弾ヲシテ申ケルバ、難ジテ笑ツル傍ノ人々、舌ヲ振テゾ感ジケル。加様無レ私処神慮ニヤ通ジケン。（同前）

青砥左衛門が無欲であることは、上述したように彼が最初に登場したときから強調されてきたが、滑川の逸話はそれをよく示す一例である。そこに、周辺の人々が彼の言動に圧倒された雰囲気も、写実的に叙述されている。第三は、時頼が、青砥左衛門を重用すべきという夢見によって、青砥左衛門に褒賞を与えようとしたという逸話である。

或時相模守鶴岡ノ八幡宮ニ通夜シ給ケレ暁、夢ニ衣冠正シクシタル老翁一人枕ニ立テ、「政道ヲ直クシテ、世ヲ久ク保タント思ハヾ、心私ナク理ニ不レ暗青砥左衛門ヲ賞翫スベシ。」ト慥ニ被レ示ト覚ヘテ、夢忽覚テケリ。相模守夙ニ帰、近国ノ大庄八箇所自筆ニ補任ヲ書テ青砥左衛門ニソ給ヒタリケル。（同前）

夢見により褒賞を与えようとした時頼に対して、青砥左衛門はそれを拒んだ褒賞を断った。

青砥左衛門ヲ啓キ見テ大ニ驚テ、「是ハ今何事ニ三萬貫ニ及ブ大庄給リ候ヤラン。」ト問奉リケレバ、「夢想ニ依テ、先且充行也。」ト答給フ。青砥左衛門顔ヲ振テ、「サテハ一所ヲモエコソ賜リ候マジケレ。且ハ御意ノ通モ歎入テ存候。物ノ定相ナキ喩ニモ、如夢幻泡影如露亦如電トコソ、金剛経ニモ説レテ候ヘバ、若某ガ首ヲ刎ヨト云夢ヲ被ニ御覧一候ハヾ、無レ咎共如レ夢被レ行候ハンズル歟。報国ノ忠薄シテ、超涯ノ賞ヲ蒙ラン事、是ニ過タル国賊ヤ候ベキ。」トテ、則補任ヲゾ返シ進セケル。（同前）

青砥左衛門は右のように時頼を説教し、恩賞を断った。もし青砥左衛門の首を刎ねろという夢を時頼が見たのであれば、そのような理不尽なことをしたのかを問いかける。さらに、国に報いることをしていて、自分が不相応

な褒美を受け取ることこそ国の利を害することである、と指摘している。滑川の逸話や裁判の逸話に関しても触れたように、青砥左衛門が第一儀と考えるのは天下のことである。このエピソードの最後の場面では、

自余ノ奉行共モ加様ノ事ヲ聞テ己ヲ恥シ間、是マデノ賢才ハ無リシカ共、聊モ背レ理恥ニ賄賂一事ヲセズ。是以平民相州八代マデ、天下ヲ保シ者也。

（同前）

他の奉行役人も青砥左衛門の名言を受けて賄賂を取らなくなり、北条家は八代まで長く続いたと話を締めくくっている。この夢想のエピソードも、滑川のエピソードと同様に、周囲の人々が恥を掻いた姿と、彼らが青砥左衛門に何を学んだかということで終結されるのは興味深い。この点は、青砥左衛門逸話の教訓的な側面を示している。また夢想のエピソードは、青砥左衛門像の解釈に関しても重要ではあるが、権力者である時頼の欠点を描いている点でも非常に重要である。執権に青砥左衛門のような補佐役がいなければ、道理に適った政治を行うことができなかったであろう、という意見が書き込まれているのである。

上述した三つの逸話において、青砥左衛門は無欲、誠実、公平、忠実という、それぞれの性格を内包している人物として登場する。社会的な役割から見ていくと、三つの捉え方ができる。裁判のエピソードでみせた一つ目は役人としての役割、滑川のエピソードでみせた二つ目は領主としての役割、夢想のエピソードでみせた家臣という役割の三つである。いずれの場合でも、青砥左衛門が第一儀と考えるのはほかでもない、天下のことであるのだ。

武家が正しい政治を行えば国が治まる。中西達治氏は「北野通夜物語」を論じた論考のなかで、遁世者、雲客、法師の対話について、世の乱れを治められない足利氏を中心とする北朝への批判である、と述べている(12)。具体的に儒学を学んだ雲客は、武家方も宮方も民のために働いているわけではないという。すなわち、正しい政治を行う人はいない、という批判である。最後に、法師が因果論を挙げ、乱世の全ては過去の因果によるものであると締めくくる。

「北野通夜物語」の思想的な背景として、仏教の因果がよく挙げられる。現世の内乱は過去のできごとによるものである、という思想が込められ、このような思想は『太平記』の中でも深い意味を持っているという見解が多い。

以下では、青砥左衛門逸話は右に指摘された仏教思想も内包しながら、政治批判的な一面もあり、それを強調するために儒学的な教訓が導入されたのではないだろうか、という観点から検討していきたい。まず考えたいのは、青砥左衛門像にみる仏教的な要素である。従来の研究では上述したように、「北野通夜物語」に関して因果応報思想が挙げられているが、それと青砥左衛門像との関わりが明らかにされていない。しかしながら、青砥左衛門像を分析すると、背景としての仏教的世界観だけではなく、青砥左衛門という人物像にも仏教の影響が深く入り込んでいることが注目される。このことは『太平記』における青砥左衛門像を理解する上で重要なことであり、以後の思想的な転換に関しても大きく関わることである。

次に考察したいのは、『太平記』が作成された中世において、なぜ儒学が、政治を批判する意図で使用されたのかということである。「北野通夜物語」を分析すると明確であるように、三者の対話は最終的に仏教的な因果応報思想で終結され、これは仏教的世界観の強力性を示している。小秋元段氏が論じるように、遁世者が青砥左衛門を事例として取り上げている目的は、君主・臣下の理想像を念頭に置き、国家の安危は君主・臣下によるとの認識を呼び寄せたいということである[13]。しかし、青砥左衛門の逸話はこうした従来の研究の見解よりも複雑な解釈を余儀なくされる。青砥左衛門は、彼に関する逸話の分析からもわかるように、天下の利を第一儀と考える人物として登場する。その意味では、先行研究の見解には妥当な側面がある一方、青砥左衛門像の全体は解明されていない。君臣関係による国の安危は指摘されたことであるが、青砥左衛門の人物像はそれに留まらず、君臣関係を超える、天下の利の重要性を提起する象徴でもある。さらに、青砥左衛門は政治を批判する一方、政道の事例も提起し、民との関係性でも描写されるので、より多彩な指導者として描かれている。

青砥左衛門像は原型の時点ですでに、政治批判に使用

された。しかし、ここでもう一つ重要な点に気付かなければならない。それは、青砥左衛門を取りあげているのは、儒学を学んだ雲客ではなく、元武士の遁世者であったということである。即ち、本来儒学を身近に知っているはずの儒者ではなく、儒学を受容した可能性がある武士が儒学的な教訓を説いていることは興味深い。武士である遁世者が、儒学的な道徳をもって武家社会の在り方を疑問し、政権批判したのである。

二　青砥左衛門藤綱の実在をめぐって

ここで、青砥左衛門の実在に関する事実関係を確認したい。『太平記』では青砥左衛門の家系などに関する基礎的な情報が少ないので、ここでは後述する『太平記評判秘伝理尽鈔』（以下に『理尽鈔』と略す）も踏まえることにする。『理尽鈔』では青砥左衛門は藤綱という名で、評定衆の一人として登場する。この情報を日本中世史上の史実と比較すると、相模守北条時頼の時、評定衆には四人[14]が任命されたが、そこには青砥左衛門藤綱の名前はない。青戸（江戸時代では青戸村、現在は青戸、東京都葛飾区）という地名が確かに存在する。例えば『新編武蔵風土記稿』（間宮士信）は、青戸村には藤綱が居住する青戸御殿があったとするなどという情報がいくつかある[15]。ところが、同書によれば、青戸村には「当時青砥左衛門藤綱居住スル然レトモ藤綱ハ上総国青砥庄ヲ領シテ在名ヲ名乗シト云ハ当所ハ其領地ニテ宿館ナトテ建テ」たという記述があり、それは『理尽鈔』由来の情報に新しく追加した情報だと見て取れる。即ち、青砥藤綱像が伝播し始めた近世初期には青戸村と青砥左衛門の関連性が生じたであろう。

藤綱の祖先に当たる人物に関しては、伊豆の歴史を考慮してみよう。『増訂豆州志稿』一三巻（萩原正平）によれば、大場十郎近郷は、大場村を領して居住したが、承久の乱に宇治において戦功を立て、その賞として下総の青砥を賜った後、そこに移住した。その四世を藤満といい、その裔は藤綱（青砥左衛門三郎）であったという[16]。また同書の一二巻では、大場村と中島村の両村に城を構えていたという[17]。だが、実は『理尽鈔』のなかで、大場十郎近郷は承久の乱で武功をあげ、上総国青砥荘を所領として給わったと述べていることから、この『増訂豆

州志稿』の情報源は『理尽鈔』だと推定される。この事例からも明らかではあるが、『理尽鈔』は地誌にも影響を及ぼしたのである。

『理尽鈔』以外の史料では、室町幕府の五番引付方の大規模な改編を示す『白河結城文書』（建永三《一二四四》年）の五番に、評定衆ではなく、奉行人、或いは引付衆として青砥左衛門の名前が記載されている。しかし、『白河結城文書』を分析した田中誠氏の論文では青砥左衛門の名前が藤綱ではなく泰重であること、また『白河結城文書』は後年の史料であることから、これらの「青砥左衛門」は同一の人物ではなかったと考えられる[18]。こうしたことを踏まえると、青砥左衛門藤綱はおそらく実在せず、架空の人物だったと思われる。

ところで、『太平記』を通して有名になり、後に広く伝播した青砥左衛門藤綱は、なんと中国思想に起源をもつ者であった。というのは、山崎美成が文政三（一八二〇）年から天保八（一八三七）年の間に記した考証随筆の『海録』[19]において青砥左衛門の実在を疑問視し、次のように提起しているからである。

> 滑川の銭　青砥左衛門藤綱を、世に賢明の人とて称誉する事なれど、吾妻鏡に一ト所も見ゆる事なく、太平記に始めて見えたり、その上藤綱が伝にいふ所、滑川の銭　程子雍華の間に遊ばれしに、関西の学者六七人従ひて行、一日千銭を失へり、僕者がいはく、農装に遭せるにあらず、水を渉る時落せるならん、程子の云、惜哉、或人誠に惜むべしといふ、一人がいはく、微なる哉千銭、何ぞ惜むに足らん、一人が云、水中と嚢中と人失ふと人得ると以てひとし、何ぞ惜しと歎ぜん、程子云、人誠に之を得ば失ふにあらず、今水に落さば用なし、吾是を以て歎ずと云々
>
> 及び訟の付て銭を山より落せし事迄、すべて皆程子の故事を以て模せしものの如し、日本史の伝ある事はいかにや、余は最も疑ふ、（『海録』）

山崎美成が考察するように、青砥左衛門像が程伊川（北宋の儒学者、生没一〇三三年～一一〇七年）を模範にしているのならば、それは『太平記』における儒学の性格、ひいては中世における儒学の性格にも関わることである。

『太平記』は軍記物語ではあるが、長谷川端氏が考えているように室町時代の始終を語る史書として唯一のものであり、またその混乱を描写する点で、室町時代を考える上で重要な史料である[20]。「北野通夜物語」[21]の文脈と山崎美成の指摘をあわせて考えると、室町時代を背景とした『太平記』において、京都北野社[22]が三人の特異な政談の舞台になった理由も見逃すことができない。久

須本文雄氏が論じるように、延文五（一三六〇）年は京都五山を中心とした漢文学の時期であり、五山の文学と禅林の儒学がその時代の学問を代表である[23]。

なお、程伊川との類似に気づいたのは、実は山崎美成が最初ではなかった。貞享二年（一六八五）に刊行された江戸時代の地誌、『新編鎌倉志』[24]の「滑川」[25]という記述をみていくと、類似した指摘が発見できる。ここでは、青砥左衛門自身は程伊川を模範にしたと述べている。具体的には次の如くである。

> 滑川は、上にては胡桃川（クルミガワ）と云ふ。（中略）【太平記】に載するを見るに、青砥左衛門藤綱が屋敷、此辺に有けるが、（滑川の逸話を中略）程子の曰、人苟に此を得は亡ふに非ず。今迺ち水に墜ば用なし。吾是を以此を歎ずと云ふ。是誠に異域同談なり。左衛門が心、能く程子にかなへり。（『新編鎌倉志』）

青砥左衛門像の成立事情はやや不透明ではあるが、以上のことを踏まえて漢学の程伊川の逸話をベースにして作成されたものだったと思われる。

『太平記』における青砥左衛門像の性格の構造を分析すると、仏教的な因果応報思想、仏教的な世界観、さらに儒学的な事例、政治批判的な精神、という幾つかの要素からなるものとして評価できる。そして、青砥左衛門は程伊川、つまり程朱学とも称される朱子学の有名な儒者を参考に描かれたことは、『太平記』において大きな意味があると評価できるのである。

三『太平記評判秘伝理尽鈔』における青砥藤綱像

近世の明君像の形成に、『太平記』とその講釈書である『理尽鈔』が関与していたことが、若尾政希氏の研究によって解明された。『理尽鈔』が作りだした明君としての楠正成像は、近世初期には領主層を中心に受容されていたが、一七世紀半ばに『理尽鈔』が出版されると民衆の上層までもがそれを読み、そうした正成像が浸透したと指摘されてきた[26]。ここでは、おなじく『理尽鈔』が造型した、青砥左衛門藤綱像がいかなるものであるかを検討していきたい。その要点を（表1）でまとめた。

（表１）『太平記』から『太平記評判秘伝理尽鈔』へ変遷する青砥左衛門藤綱像の要点

出典	『太平記』 「北野通夜物語事付青砥左衛門事」	『理尽鈔』 「時頼禅門諸国修行事」 （第一話）	『理尽鈔』 「貞時回国事」 （第二話）	『理尽鈔』 「青砥左衛門事」 （第三話）	『理尽鈔』 「相模守夢想事」 （第四話）
基礎情報	青砥左衛門。北条時頼の補佐。財産があるが贅沢をしない、慈悲深い質素な生活をおくる人物として紹介される。	『太平記』にはない詳細な問題意識を提示し、当時の政治や社会問題に関して指摘する。	北条時宗の代に藤綱は世の中の賄賂問題などを報告したが聞き入れてもらわなかった場面。	青砥左衛門尉孫三郎藤綱。生立、祖先、教育、出家などの増幅。評定衆に就いた背景や時頼に召し使われる背景が語られる。人々に金銭を貸用する寛大な人物。	藤綱の兵力や軍事能力。
三つの基礎逸話とその増幅	・裁判の逸話 青砥左衛門は裁判で不正を糺し、荘官の所帯に安堵をもたらして、時頼を敗訴した。その後、理非を明らかにしたのは時頼のために行ったと言い、荘官の引き出物を返した。 ・滑川の逸話 無くした十文を五十文で探させたが、「小利大損」とからかわれた。青砥左衛門	時頼への献言が展開されるが、「如レ書」とあるだけで、『太平記』の逸話を挙げていない。藤綱は、政治問題の起源に二つの問題があると指摘する。一つ目は、上下が遠く隔たっていること。二つめの問題は、儒者が経典を説いてもそこで主張されている道徳が彼らの行跡には反映されていないこと。	『太平記』にないエピソード。藤綱が死去した後の治世は元の悪い状態に戻った背景。	「其外ノ行跡如レ書如シ」という前提となっているが具体的な逸話を挙げていない。 ・片瀬川の新しい逸話 藤綱は三嶋詣から帰る際に片瀬川に尿をする牛を見かけ、時頼が催したイベントをそれに喩えた。仏教僧のこのような贅沢なイベントは民を苦しませると批判した。	

	は、その金銭が周辺のためになる、引いては天下のためになるのだと説教した。				
	・時頼の夢の逸話 時頼が、青砥左衛門を重用すべきという夢見によって、青砥左衛門に褒賞を与えようとしたが、青砥左衛門は時頼を説教し、褒美を拒否した。				『太平記』の夢想のエピソードを具体的に叙述し、さらに藤綱の献言も展開する。『太平記』で夢想の告げを与えた背景を説明し、藤綱に褒美を与える口実が書かれている。藤綱の献言の展開もある。
総括	賢明で忠実な家臣、公平な裁判官、国の利益を考える人物、という描写。教訓性が強いが、具体的な行動方式が示されていない、『太平記』での青砥左衛門がより抽象的なキャラクターとして評価できる。	藤綱の賢明な献言はより強調され、時頼との君臣関係が重視される。藤綱は政治の具体的な問題を詳細に示すだけではなく、正しい政道も提示し、また天下の利を第一儀とする。忠がある者を賞すれば、国が安定するという終結。	藤綱と彼の公正さの重要性が後世との関係で意味づけられる。藤綱の活躍ももちろんだが、その賢明な発言を聞き入れた、トップに立った時頼こそ重要な存在であった。	藤綱の人生や生活など、より詳細な描写がなされたことによって、馴染みやすい人物となっていく。藤綱は単に政治問題を指摘する人物だけではなく、多くの社会問題（仏教僧の批判など）を視野に入れている忠臣の象徴となる。	褒美を断った逸話を大きく超える、より実用的な話が挙げられる。藤綱は武将が軍陣において負担する軍役に関して述べる。武将としての描写は藤綱像には従来なかったリアリティーを与える。

①『太平記』の原型に増幅

まず、青砥左衛門に関する情報が『太平記』の原型より基礎的な事柄でどのように増幅されたのか分析したい。前節でも触れたことだが、青砥左衛門は『理尽鈔』では藤綱と呼ばれるようになった。以後、この名称は近世では多くの史料に継承された。『理尽鈔』の「青砥左衛門事」では、藤綱は次のように紹介される。

傳云此人ハ元ハ豆州ノ住人也。先祖大場十郎近郷承久兵乱ノ時宇治戦ニ高名シテケレハ。上総国青砥ノ郷ヲ給テケリ。是ヨリ代々相傳シテ持来レリ。此藤綱ハ青砥左衛門藤満ニハ末子ナル上ノ思ヒ人ノ腹ニ生レタレハ。父ノ賞翫モ尋常ニハ劣ケリ。甲斐々々敷譲与ベキ所領ナンドモナケレハ。出家セサセントテ十一歳ニシテ真言師ノ寺ニ入テ彼ノ門人トナセリ。幼時ヨリ利根ニシテ学問ヨク仕テケリ。如何ナル所存カ有リケン。二十歳ニシテ還俗シテ青砥孫三郎藤綱トゾ名乗ケリ然共公方奉公ノ便リモナク徒ニ居タル間ニ。傍近キ所ニ俗学ノ名ヲ得タル行印法師ト云者有リケルニ。數年隋順シテ又学文ヨク仕テケリ。（『太平記評判秘伝理尽鈔』(27)「青砥左衛門事」、九一丁）

『理尽鈔』の藤綱逸話の叙述には「伝云」と開始するところがしばしばみられるが、すでに明らかにしたように、ここに叙述される情報は『太平記』に載っていない。中村幸彦氏も指摘するように、この「伝」は講釈師の語り口の一つであり、講者の博識の見せ所であった。すなわち、講釈師が情報を付け加えたりしながら、太平記読みの娯楽性要素を高めた箇所である(28)。ところで、この「伝」は『太平記』で書かれているところを前提としつつも、原型と異なるところも多く見受けられる。

前述したように『理尽鈔』によれば、藤綱の祖先は武功を上げた有名な武士であったので、所領を給わった。また父親に関する情報も僅かであり、それも藤綱の出家との関連で取り上げられている。困難だった藤綱の生立ちは後の活躍と関係している。藤綱は財産がなかったため若くして出家し、まず真言宗の寺院に入門した。この

藤綱像は『太平記』の熱心な仏教徒というイメージとも一致している。しかし、はやくも二十歳の時に還俗し、孫三郎と名乗った。僧侶の生活をこの早い段階で諦めたことは、後述するが、『理尽鈔』全体に見受けられる仏教僧批判と関連づけられる。

最後に挙げられる基本情報は、藤綱が還俗した後に、「俗学」の師匠について勉強に励んだということである。藤綱は多くのことを学んだが学者ではなく、教養のある武士であったことに注目しておきたい。

藤綱はこの後、二十八歳の時に時頼と出会い召し使われるとある。そのエピソードを詳細に分析する前に、藤綱の性格の描写がどのように増幅したかを見ていきたい。

先の引用文のように、藤綱は若いころから勉強熱心で利発であり、成長したころの性格は正直と賢才という言葉で表現されている。藤綱は評定衆についた後に、以下のように描写される。

後ニハ評定衆ノ頭ニ成テ天下事大小共ニ口入シテケリ。富デ不レ侈威有テ不レ忿不レ好ニ遊楽ヲ一。為レ身財ヲ不レ散親ニ仍テ非ヲ不レ隠他ヲ悪ミンセズ。悪ヲニクミ善ヲ親クセリ。其外ノ行跡如レ書少シモ私ハナカリシ。去ルハ此藤綱ハ遠国侍大名高家ノ人々在鎌倉セラレケルニハ。分々当々ニ金銀ヲ借シテケリ。利ヲ取ル事ナシ。所領ノ少キニハ本銭ヲモ不レ取或ハ半分本銭ヲ返納セシモ有リシ。人々是ヲ難レ有情ニ思入レテ。田舎ジトヽ名付テ是ヲ遣ス則ハ大ニ腹立シテ不ニ承由一シテ申ケルハ。大名モ小名モ在鎌倉程ノ大事ヤ侍レ遠国御領知ヨリ持運ビ給糧(29)ヲサヘ幾虚トナルトヤ思ヒ給フラン。實ニ莫太ノ事ゾカシ御身事ハサテ置ヌ御領分ノ諸民貧ニ成テ飢タル色有リナント存候。某為レ国是ヲ思フ故ニ小物借進セ候。又其人ヲ親フ思フニ非ス。(同前、九三丁)

まずこの記述で注目したいのは、藤綱は自分のために一銭も使用しないが民のために金銀を惜しまないという原型に加えて、詳細な描写である。藤綱は賄賂を憎み、さらに遊楽も好きではなかったことが述べられている。この描写では、藤綱の質素な生活ぶりが一層深められる。ただし、性格の描写は展開されるがその具体例が挙げら

れておらず、「其外ノ行跡如レ書」とある。即ち、「書」（『太平記』本文）に記載されている情報を『理尽鈔』は前提としている。

藤綱が公平な人物として紹介されることに関しては、もう一つ重要な指摘がある。それは、藤綱は裕福ではあったが自分自身が質素に生活し、人々に金銭を貸与したということである。さらに、彼の助けを人々が有難く思ったことも記されている。これが、『理尽鈔』に挙げられたことが重要であり、近世初期の金銭に関する意識を象徴していると思われる。

『太平記』での藤綱は滑川の逸話と裁判の逸話で登場するが、『理尽鈔』ではこの二つの逸話を前提として、それを増幅する。したがって『太平記』との比較は多少困難ではあるが、原型の解釈に関する三点目として論じた、『理尽鈔』で「相模守夢想事」として位置付けられた夢のエピソードがどのように変形したかを見ていくことにしたい。最初に念頭において考えたいのは、次に挙げる『理尽鈔』の「伝云」の後、『太平記』で夢想の告げを与えた背景を説明するところである。つまり、所領が少ない藤綱に褒美を与える口実が書かれている。

傳云藤綱ニ給フ所ノ所領三万四千餘貫。然共猶自餘ノ頭人評定衆ノ分限ヨリハ少也。依レ之時頼モ青砥左衛門ニ猶所領ヲ與ヘ。威勢モ出来ル様ニナント被レ思。然共次デモナケレハ充テ被レ行事モナシ。二六時中ニ奉公怠ナク。又訴ノ来ゴトニ正直ノ明言ヲ咄ク。其此天下泰平ニシテ軍ナケレハ勝レタル軍忠モナカリシ。依レ之黙止給ヒケルカ。餘ノアラマホシサニヤ夢想ノ告有リトテ覚ハ行ヒ給ヒシ。藤綱如レ書申シテ補任ヲカヘシ参セテケリ。其後程経テ時頼又藤綱ヲ召シテ密ニ宣ヒケルハ。所領ノ地モ少ナケレハ威モ少キ物ゾ。我汝ヲ以テ耳目トス。汝毎事ヲ報行センニ威重カラザレハ。天下人謂フ事ヲ不レ信。最前ノ所領ヲ給ハレカシト宣ヒケレハ。（『太平記評判秘伝理尽鈔』「相模守夢想事」、九五丁）

波線文以降にストーリーが本題に入るが、「如レ書」とあるだけで具体的に記述されていない。『理尽鈔』では『太平記』の話を前提にこの逸話の解釈を読ませているのである。『太平記』に書かれた具体的な事柄を叙述しな

いだけでなく、さらに藤綱の台詞を全面的に変えたことが次の段落から読み取れる。所領が少ないので藤綱が軽んじられるのではないかという時頼の思いに答えて、藤綱は次のように述べる。

青砥左衛門仰ノ旨 某一人ガ身ニ取テ忝候。殿覚思召サンニ於テハ一所ノ所領ナク共。天下ノ人豈某ヲ軽ク思ハンヤ。又万々貫ノ領主ト成テ候共。殿ノ御覚ヘ左程ニモナク侍ラハ。世ニハ軽ク思ヒナン。然ハ某ガ事政道ニ私ナキ者ト頭人評定衆何レモカ中ニテ。切々ノ仰コソ有ラマホシキ事ニテ侍フ。左タニモ候ハヾ某ガ威ハ強ク成リ侍リナン。是全ク私ノ威ヲ強フシテ身ノ楽ニセントニハ非ス。殿ノ仰ノ天下為ニモヤト思召仍也。又某少モ侈ノ心有テ邪曲ノ事ヲ執シ申サハ自餘ノ頭人評定衆ノ罪ヨリモ倍シテ行ヒ給ヘ。愚ナルカ咎ハ軽ク。智ナルカ法ヲ背クハ咎大ニ重キ物ナレハ也。又所領ノ事某別ニ所用ナシ只今ノ御扶助ノ分ニテ。猶金銀米銭ノ身ニ餘テ倉蔵ニ積置候ヒシゾカシ。是ヲハ何レニモ天下ノ御用ニ立ントコソ存候ヘ。（同前、九五～九六丁）

藤綱はこのように、天下（国）のために政治を行うのだという。

「相模守夢想事」は右に引用した段落まで、『太平記』の夢想のエピソードとは叙述の面で異なっていても関連性が把握できる。しかし、以下に引用する『理尽鈔』の夢想のエピソードの最後の段落では、武将が軍陣において負担する軍役を引き合いに出して、自らの軍事能力（統率や謀略の能力）では二千人を越える兵を使いこなすことは無理だと述べる。

又自然ノ事ノ有リナンニハ。某ガ兵ヲ下知シテ軍ヲセサセン謀ノ分限ヲ量ルニ。二千ノ兵ヨリ外ニハ下知スル事難レ成存ジ候。今ノ分ニテ能郎従三百餘人。軍兵凡三千餘ハ持テ候。奥州九国ノ国マデ罷向候共。二千兵ニテハ罷向テ三年四年程ハ在陣ヲ仕ランニ。殿ヘ少ノ苦労ヲモ懸奉ル間敷ニテ候ソ。我カ智謀ノ分才ニ過テ。兵ヲ戦場ニ召具シ候ヘハ。其兵皆物用ニ不レ立ヤラン古来ノ傅ニ候ゾ。然

レハ今ノ領ノ上ニ又某シニ所領ヲ給ハランハ無レ益事ニ候ソ。最前如ク申ニ上ル身ノ分限（私云口伝アリ）不レ知報国ノ忠ニ餘（アマリ）テ賞ヲ受ンハ。是ニ過タル国賊ヤ候。然ハ賞ヲ盗マレ給フ人ニ非スヤ。賞ヲ被レ盗給フハ御智恵ノタラサル故也。左有レハコソ最初攝政殿家ノ所領ノ外ニ官位職ノ三ツノ領ヲ分テ置キ給ヒシハ（ソノカミノセツシヤウトノ）是故（私云口伝）トコソ存候へ。是皆所領ヲ徒ニ不（位職ナリ人ノ少ク入ルハ領少シアリ人ノ多ク入ルノ職ハ領大）レ成（ノ高下ニ不可依）為ニ候ハスヤト語リケレハ。時頼大ニ信服シ給ヒタリトニヤ。（同前、九六～九七丁）

このように藤綱は今の所領で十分だという。結論ではまた『太平記』と同調して、我が身の分限を知らず、自らが行っている職務（それは国に報いるために行っていることであるが）を越えた賞与を請けるのは「国賊」であると述べる。

② 新しく創作されたエピソード

前項で述べたように、『理尽鈔』の藤綱に関する逸話は『太平記』を前提としている。『理尽鈔』では『太平記』本文を前提として、そのエピソードを解釈したり、増幅したりしている。その一方で、『理尽鈔』には『太平記』にない新しい逸話が付け加えられている。藤綱は、『理尽鈔』の三十五巻に「時頼禅門諸国修行事」、「貞時回国事」、「青砥左衛門事」、「相模守夢想事」のエピソードで取り上げられている。この中で新しく創作されたエピソードは「時頼禅門諸国修行事」と「貞時回国事」であり、さらに「青砥左衛門事」の内容が原型と比較できないほど変形している。

まずは「時頼禅門諸国修行事」の政談のエピソードから考えたい。

当世ニ法ヲ軽ジ無道ノ行跡ノ者多候ハ。其ノ根ニニテ候ソ。一ニハ殿ノ御政ニ於テハ少モ奸曲有リ共不レ見コソ存候へ。又御誤有共不レ覚候。然共上下ノ遠キニコソ候へ。国中ニ不孝ノ者不忠不道ノ如何程モ候ナレハ論モ又多シト思召候へ。（中略）一天下覚喧ケル共殿ハ御存ナキ事ハ。上下遠キ故ニテ候ハスヤ。覚候へハ一天下ノ民ノ歎多候物ヲ是一。（『太平記評判秘伝理尽鈔』「時頼禅門諸国修行事」七三、七四

丁）

藤綱は問題の起源として二つのことをみている。まず一つ目は、上下が遠く隔たっていることを問題にする。時頼の政治には、奸曲も誤りも見られないが、上下が遠く離れているために、国中で不孝・不忠・不道が満ちあふれているのにそれに気づかないことが大きな問題だという。二つ目の問題として藤綱は次のように述べる。

又当時鎌倉中ノ儒者行跡ヲ見ルニ重欲ヲ専トシテ奸ニ佞ニ慢ニシテ。所行ノ善悪ヲ不レ謂我心ニ相ヒタルヲハ讃。我心ニ不レ相謗ル偏執ノ心深クシテハ人ノ善ヲ怨ミ他ノ悪ク成ルヲ喜ビトス。カリニモ道ナル事ヲ見候ハズ。広学ノ誉有ル儒者皆然也。文ヲ談ズル言葉ト行跡ト大ニ違ヘリ。是ニ仍テ彼等ガ弟子トシテ集リ学好者ノ行跡皆彼ヲ真似セリ是ニ。（同前、七四丁）

二つめの問題は、儒者が経典を説いてもそこで主張されている道徳が彼らの行跡には反映されていない。儒者たちは重欲をもっぱらにして奸佞で高慢で偏執が激しい。それを弟子が真似するのでさらに問題が広がるという。藤綱の献言が終わった後の時頼の反応は次のようなものであった。

時頼大息ヲツキテ聞給ヒシ。暫（シハラ）ク有テ宣ヒケルハ。御辺覚国中ノ政道ノ乱タルヲ我ニ知シメ給フ事。誠ニ大忠ノ至リ演（ノブ）ルニ無（シ）言葉（同前、七五丁）

他の役人は自分の立場を考えて意見を述べなかったが、藤綱が正直に献言したことを時頼は大忠として評価していることは興味深い。

最終的に、時頼は自分が死んだと見せかけて藤綱を密かに召し、無道の者を探し出させて罰する。また、時頼が西明寺入道として諸国をまわる時、昔問題を起こした武士の子孫と出会い、彼の忠実を評価し、忠があるものを賞するべきという形で話が締めくくられる。

忠有ルヲ賞スル事皆理世安民ノ政ナルニヤ。又依レ之諸国ノ武士共近年ノ鎌倉ノ政道ヲ奉行頭人ノ侈リ

ニ付テ恨ヲ含シ輩忽（タチマチ）ニ念（イカリ）ヲ止テ望ヲ達シテ此ノ禅門ノ事ヲ賀シ又ハ邪ナル奉行頭人ヲヘツライシ者共身ヲイダイテ先非ヲ悔テ泰平世トゾ成リシ。青砥左衛門申ケルハ此ノ事今十年共御沙汰ナカリセハ。世ハ大乱ニ及ブベカリシゾカシ。（同前、七九丁）

道理をもって世の中を治める、民を安治させるという「理世安民」のことは、『理尽鈔』での藤綱のエピソードではよく挙げられる。「理世安民」の政治が実現されることによって、奉行頭人が驕っているとして怨みを含んだり、へつらったりすることもなくなり、「泰平」の世となった。藤綱が言うには、あと十年、時頼殿のご沙汰がなければ、世の中は大いに乱れていたはずだ、と。

この役割が「貞時回国事」でどのように変化していくかを考えたい。ここでは、藤綱が時頼の御代以後にどのように活躍したかが語られている。「貞時回国事」では、時頼の行跡は確かに重要だったが、それは北条時宗の代になると変わったということが指摘されている。正直な者が何人かおり、諸国を修行する彼らが政治問題や民の悩みを尋ねると、賄賂問題など藤綱が以前時頼に指摘したことが未だにあることに気づき、彼らは時宗に報告した。

藤綱一人理ノ当ル所ヲ申セシ間鎌倉中ノ事申ニ不レ及。遠国遠島マデノ左程ノ僻（ヒガイ）ハナカリシ。藤綱死去ノ後七箇年ヲ不レ過覚奸曲ノ事多カリシ後ノ評ニ見ヘタリ。（「貞時回国事」、八一丁）

しかし、藤綱が死去して七年も経たないうちに、藤綱が登場した以前の状況が戻ってきたような叙述が見受けられる。

「貞時回国事」では藤綱に関する叙述は短いが、藤綱の言動は無論必要であったが、藤綱の賢明な発言を聞き入れた、トップに立った時頼こそ重要な存在であったということである。もし時頼が藤綱の正しさを念頭に入れて政治を行わなければ、藤綱も役に立たなかったであろう。

『理尽鈔』にみる時頼と藤綱との関係性を、『理尽鈔』を読んだ近世の人も、右のように解釈した一例を挙げよう。『理尽鈔』をふまえた熊沢蕃山（陽明学者、生没　元

和五（一六一九）年～元禄四（一六九一）年）は、「北条家青砥左衛門が謗りを聞て家の命脈を延たり。高時に正成あれども誹謗を忌故に慎て不発」[30]と考えており、君主と家臣との関係に注意を払いながら、君主が忠言を聞き入れない場合は政治ができないことも指摘していた。『理尽鈔』での藤綱は、武士のモラルとして、君主との関係や正しい政治の在り方を提示していることは明確である。

③　思想的な背景の転換

『太平記』の原型と『理尽鈔』を比較すると、『理尽鈔』では滑川の逸話や裁判の逸話が前提となって青砥左衛門像が増幅され、また幾つかの新しいエピソードが追加されたということが見て取れる。ここでは、『理尽鈔』における藤綱を『太平記』と同じように解釈できないことに留意したい。『理尽鈔』では藤綱像は、近世における武士の鑑になっていると同時に、政治問題を指摘している賢明な補佐として登場する。『太平記』とは異なり、『理尽鈔』でもっとも重視されるエピソードは、最初に藤綱が登場する、前項で分析した「時頼禅門諸国修行事」の政談の逸話である。

全体的に分析してもっとも興味深いといえるのは、『太平記』では仏教的世界観に基づく思想的な背景に多少の儒学的な要素が入り込んだことに対し、『理尽鈔』ではその割合が逆転するということである。『理尽鈔』において藤綱は、仏の慈悲に叶う、人々のことを公平に考えている人物として登場するが、第一項で分析したように彼は若くして還俗し、おそらく仏教に失望したということも考えられる。また以下に紹介するように仏教僧を揶揄するという態度から、仏教の思想を身につけながらも、僧侶層の生活ぶりなどを批判したことが分かる。即ち、『理尽鈔』で藤綱と関連して記述されている仏教批判は、一括して仏教批判とは言えず、当時に活躍していた不正な僧侶への批判であるものと思われる。

藤綱が三嶋詣から帰る際に、仏教僧を揶揄するエピソードを事例として挙げよう。

藤綱廿八歳ト申セシニ、時頼ノ三嶋詣（ミシママウ）デノ有リケルニ。藤綱忍（シノビ）ノ供奉（グボウ）仕テケルカ下向ニ被（レ）趣（ヨモムキ）ケル時

ニ供人々雑具共取付テ鎌倉ヘカヘル牛。片瀬川ノ川中ニテ尿シリケルヲ。藤綱申ケルハ哀　巳ハ守殿御佛事ノ風情シケル牛哉ト打笑テ通リケルハ。打連タル侍共守殿ノ御佛事ノ風情仕ケルトハ。得コソ心得ネト尋ケル。藤綱申ケルサレバヨ思ヒ合タル事ノ有ルゾトヨ。此比雨數日間不レ降田畠葉ヲ枯シテ諸民飢ヲ悲ム所ニ。何ゾヨ。アノ牛田畠ノ程近キ所ニテモ尿ヲハセズシテ水餘リテ流行川中ニテ尿マレハ。国ノ用ニハ不レ立ゾト申ケル。傍ノ侍共申ケルハ。實ニ宣フ所ノ如シ然ルヲ守殿ノ御佛事ト被レ申様ハ如何ニト問ヘハ。藤綱打笑テ鎌倉中ニ有賢智徳ノ僧等。貧ニシテ飢ニ望ム幾等モ有リ。無智ノ破戒ノ法師ノ金銀米錢ニアキ満タル多シ。然ルニ去ル春ノ御佛事ニハ破戒無智ノ僧ノ富貴ナルヲ計召シテ。御供養有リテ持戒智徳ノ實ニ佛法ヲ修行スル僧ヲハ御供養ナシ。施物又然也御佛事慈悲ノ行ニ非ストソ語リケリ。打連ケル者理リニコソト感ジケル。（『太平記評判秘伝理尽鈔』「青砥左衛門事」九一～九二丁）

藤綱は三嶋詣から帰る際に片瀬川に尿をする牛を見かけ、時頼が催したイベントをそれに喩える、という失礼なことをした。しかし、後に時頼は藤綱の発言を知った時に感動し、藤綱を召したとされている。『理尽鈔』はこのエピソードを、藤綱が『太平記』で時頼に登用されたことの裏付けとして追加したのであろう。

ところで、この逸話をさらに分析すると、藤綱が仏教僧の態度を問題としたことは明確である。本当に知識があり悟った僧であれば、民を苦しませるこのような贅沢なイベントをしないはずだが、この僧侶はそれをしたのだと批判する。

時頼が催したイベントを揶揄しながらも、後に藤綱の賢さが評価されるという点で、このエピソードは重要な意味を持っている。なお、このエピソードも後世に継承され、例えば『三鱗青砥錢』（富川吟雪作、明和元〈一七六四〉年版、青本、一冊）に描写されることもあり、藤綱のキャラクターの重要な要素となっていく。

四『北条九代記』における青砥藤綱像

延宝三（一六七五）年に出版された『北条九代記』は、『太平記』の青砥左衛門像と『理尽鈔』の藤綱像が融合した、より娯楽性の強い読み物である。これにより、青砥藤綱像もより人口に膾炙するようになったのである。管見の限りでは、同書が流布して以後の藤綱に関する作品の多くはその藤綱像を引き継いでいくという点で、『北条九代記』は重要な史料である。全体的にほとんど『理尽鈔』と同じ内容ではあるが、『北条九代記』の藤綱にかかわる描写は、後世に継承されるので（例えば浄瑠璃など）、ここで同書の政談のエピソードを詳細に分析しておきたい。

『北条九代記』は藤綱が具体的に登場する四つのエピソードも載せている。一番目は第八巻の「相模守時頼入道政務附青砥左衛門廉直」であり、『理尽鈔』にみられる家系などが紹介され、時頼が催したイベントを通して僧侶を批判するエピソードである。二番目は以下に検討する第九巻の「時頼入道與（ト）二青砥左衛門尉一政道閑談」であり、三番目は同巻の「時頼入道諸国修行附難波尼公本領安東」のエピソードである。この二つのエピソードは『理尽鈔』の「時頼禅門諸国修行事」に依拠しており、『北条九代記』ではそれを二つに分けられている。四番目のエピソードは第十一巻の「回国使私欲非法附羽黒山訴状」であり、藤綱の死後、貞時治世下の賄賂問題が描写されている。

ここでは第九巻の藤綱に関するエピソードを詳細に分析することにしよう。

西明寺時頼入道は、天下政理の正しからんことを思ひ、四海太平の世を守りて仁を専らとし、徳を治め給ふと誰も時既に澆薄（ゲウハク）に降り、人また邪智の、盛なる故にや、諸国の道義次第に廃れて、非法非礼のみ行はれ、正道正理は埋れ行きしかば、罰を受ける者は日を追て多く、誡を蒙ぶる者は月に随ひて少からず、奉行頭人といはるゝ人々も、不孝不慈にして廉直ならず、之に依て職を革め所領を放（ハナ）たるゝ輩（トモガラ）、これ更に絶（タ）ゆることなし、時頼入道朝夕これを歎き給ひ、青砥左衛門尉藤綱を召て、竊（ヒソカ）に仰せられけ

る、（『北条九代記』[31]「時頼入道與二青砥左衛門尉一政道閑談」）

ここでは、時頼が政治的問題を語った後に藤綱の意見を求める。『理尽鈔』での藤綱が少し憚りながら献言するのに対し、『北条九代記』では、「藤綱頭を地につけ、涙を流して申けるは」と、時頼の高位を強調する表現となっている。藤綱が述べていることは、両史料とも同じである。次のごとくである、

政法を軽しめ無道の行ひ多く候ことは、全く御行跡に奸曲ましますにもあらず、政道の誤りありとも覚えず候、但し上下の遠きに依ての御事にこそ、国家に不孝無道のもの、数を知らず、訴論これより多く出来候と見えて候、その中に訴論を構へ、内縁を以て奉行頭人に窺へば、非なるは罪科遁るべからず、下にて某扱ひ侍らんとて、理非の訴へを上に通ぜず、推して中分に決せらる、理あるは半分の負となり、非あるは大に勝ち候、愚なるは之を国法かと思ひ、智なるは歎きながら、さて止み候、これより遠境の守護目代等、皆この格に習ひて非道を行ひ、百姓を責虐（セキギヤク）し、押領重欲を専らとす、天下喧（カマビス）しく相唱ふと誰も、更に以て知しめさず、これ上下の遠くましします故にて候（同前）

藤綱は、上下が遠く隔たっていることを問題にする。時頼の政治には、誤りが見られないが、上下が遠く離れているために、世の中の多く問題に気づかないことが大きな問題だと述べている。また政治的な問題の指摘に留まらず、藤綱は次のように述べている。

又当時鎌倉中に儒学さかりに行（ハヤ）らかし、聖賢の経書を取扱ひ、講読の座を啓くこと軒を並べて聞え候、かの学者の行跡、更に古聖の掟を守らず、佞奸重欲なること、殆ど常人にまさり、毀譽偏執（キヨヘンシフ）を旨とし、他の善を蔽ひ妬み、悪を顕して救ふことなし、況んや佛法はこれ王法の外護（ゲゴ）として、国家平時の資（タスケ）とす、道行殊勝（ダウギヤウシユショウ）の上人有りて、四海安穏の祈りを致し、生死出離の教へを弘むるは、佛法の正理なり、然るを今鎌倉諸寺の、僧法師といはるゝもの、多く

は空見に落ちて佛祖の教へに違ひ、無智にして住持職をうけ、僧綱高く進み、貪欲深く檀那を諂ひ、何の用ともなき器物を貯へ、茶の湯遊興に施物を費やし、身には綾羅を嚴り、食には肉味を食ひ、美女を隠して濫行を恣にすまた其中に学智行徳の僧あるをば、妬み憎むこと、老鼠を見るが如くし、王法を恐れず公役もなし、また〳〵白俗に示す所、地獄浄土を方便の説とし、三世不可徳の理を誤り、罪悪に自性なし、善法も著せざれと、これによつて檀那の心無道の陥り、法度を背き道を破り、世の災害となり行き候、神職祝部のものは、神道の深理をとり失ひ、陰陽顕冥の相に惑ひ、祈禱に事を寄せて財宝を貪り、託宣に詞を假て利欲を旨とす、武家より始めて儒仏神道に至るまで、大道儘く廃れ、利欲大に盛んなり、奉行頭人より萬民まで、皆奸曲邪欲を本として迭に怨み、迭に怒り、胸に詛ひ口に謗る、此故に国中は頻に喧し、只殿御一人正道を重んじ正理を守り、御威勢強くまします故に社、上部ばかりは、せめて安穏無事の、世の中のやうには見えて候ものをと、語り申しければ（同前）

ここでも『理尽鈔』を引いている。藤綱は現状の政治問題の根幹に、「武家より始めて儒仏神道に至るまで、大道儘く廃れ、利欲大に盛んなり、奉行頭人より萬民まで、皆奸曲邪欲を本と」する、という世俗的な倫理問題を見ている。学問や宗教に関わる社会層をはじめ、武士までの広い範囲で根本的な道徳が廃れ、利欲が盛んになり、上にいる者の態度を習って奉行役人も万民も邪欲に陥った状況が叙述されているのである。

藤綱が献言したエピソードの続きでは、諸問題を糺すために藤綱が非道の役人を密かに探し出し、時頼が彼等を罰するというように、不忠の者が罰せられたことが述べられている。このエピソードの後半文では、奉行役人の間に起きた訴論と、また、政道からはずれたことを直接調べたいという希望を時頼が二階堂信濃入道と青砥藤綱に打ち明かし、自分が死んだと見せかけ、二階堂とともに諸国を修行するという展開が見受けられる。最後に、二階堂と藤綱は残りの不忠の奉行役人を罰し、たとえば波尼公は本領が戻されたというように、忠がある者を賞するという形で話は締めくくられる。

藤綱は、『理尽鈔』と『北条九代記』でも北条政権の柱として紹介されるが、正道からはずれた奉行役人を糺そうとする藤綱像が『北条九代記』ではより詳細に描写されている。『北条九代記』ではまた、藤綱の役割がより称賛されている一方で、執権の判断が重要となっている。すなわち同書によれば、北条政権が長く保たれたのは、藤綱のような補佐役を得たからではなく、北条時頼が藤綱の献言を聞き入れたからである。

『理尽鈔』と『北条九代記』とで共通するのは、国の繁栄、君主の政治的な権威の保護、邪悪な政治家の取り締まり、撫民などのために活躍している藤綱を、賢明で忠実な家臣として解釈している、というところである。無論、賄賂を憎み、質素な生活ぶりを送り、無道の役人を罰するという藤綱像も描かれている。『理尽鈔』と『北条九代記』の中の藤綱像に関しては次の点も指摘できる。すなわち両書においては、焦点は君臣関係であり、君主と役人の正しい在り方、さらに理想的な武士に置かれることは、近世初期の藤綱像の解釈に関して非常に重要な点である。

『理尽鈔』で登場する時頼との政談のエピソードは『北条九代記』にも取り上げられ、より詳しく展開されている。井上泰至は『北条九代記』について、「『太平記』の筆法をならいながら、徳川幕府のモデルである鎌倉幕府の歴史を読み物化した」[32]としている。この指摘を踏まえれば、『北条九代記』の藤綱像は、鎌倉時代の人物を事例として徳川幕府を肯定する普遍的な価値観がどのように形成されたか、を示してくれているように思われる。

おわりに

本論文では青砥左衛門逸話の原型と、一七世紀の二つの重要な軍書における影響関係とあわせながら、青砥左衛門藤綱像の描き方に焦点を当てた。まず、青砥左衛門の原型は『太平記』に求められ、そのイメージは近世初期の『理尽鈔』で増幅され、中世とは異なる藤綱像が打ち出されたことを明らかにした。『太平記』では青砥左衛門像の社会的な役割に関して、三つの捉え方ができると指摘した。裁判のエピソードでみせた一つ目は役人としての役割、滑川のエピソードでみせた二つ目は領主としての役割、夢想のエピソードでみせた家臣という役割の

三つである。

青砥藤綱像の描写手法に関して、近世では主に『理尽鈔』系統の思想が伝播したといえる。それには二つの側面が指摘できる。一つ目は僧侶を批判する側面であり、二つ目は、儒学的な教訓として君臣関係、臣民などの関係を象徴する側面である。本論文では触れなかったが、この二つの側面のうち、一七世紀後半に発生する浮世草子での藤綱像には、儒学の教訓的な側面しか継続されないと思われる。

本論文では一七世紀までの藤綱像を検討したが、最後に近世の藤綱像がいかに展開していくのか、概観しておきたい。藤綱像は、『理尽鈔』以降では『北条九代記』を通して典型となる。以後文脈が変化することがあるものの、藤綱逸話に新しい事柄が追加されることはない。

近世にはあわせて三つの藤綱像が並存していた。一つ目は、『理尽鈔』系統の藤綱像とそれを元としながら、一七世紀の文学作品などで描かれる武士の忠義や武士の正しいあり方を提起する描写である[33]。これ以降に生れてくる二種類の藤綱像に『理尽鈔』系統の藤綱像の影響が見受けられながらも、目的、思想や描写の仕方などの多くの側面で区別できる。二つ目は、一八世紀初頭の思想家を通して再構成された描写である[34]。三つ目は、『理尽鈔』や講談『鉢木』などを融合した浄瑠璃系統の藤綱像である[35]。

青砥左衛門は『太平記』の小さな逸話で登場した虚構の人物だったが、『理尽鈔』を通して近世の精神を促がす非常に重要な役割を担う人物像まで展開していった。ところが、藤綱の行為は広く知れ渡っていることはなぜだろうか。以上の関心も念頭に起きながら、藤綱像の正体を知ることは、彼の逸話を心得た社会の思想を理解する上で重要な役割を果たすのではないかと考えている。

【注】

(1) その代表作は、藤綱の名裁判を描いた曲亭馬琴の読本『青砥藤綱摸稜案』であり、文化八（一八一一）年に刊行された。

(2) 藤綱像は教訓画や英語の習得教科書などで利用されるようになり、新たな使用方法を得る。例えば、『Kinkodo English Readers』（明治二八〈一八八五〉年、金港堂）では、日本の文化の重要な人物として取り上げられる。また藤綱が登場する小説として、明治三一（一八九八）年

刊、桃川燕林講演の『青砥藤綱笊屋政談』（三輪逸次郎版）などが挙げられる。

(3) 例えば、『偉人の修養』（山田愛剣著、大正一三〈一九二四〉年、新興社）にみる藤綱の教訓は、当該の時代の政治に適した解釈文になっている。昭和五（一九三〇）年刊の『六年生の修身』（安島健等編、大阪宝文館）は昔の人の生き方を子供が簡単に理解できるように書かれた。

(4) 展覧会記録『親鸞と青砥藤綱―東京下町の歴史伝説を探る』（平成十七年度特別展、葛飾区郷土と天文の博物館編集、葛飾区郷土と天文の博物館、二〇〇五年）、川柳との関係に関して日暮聖「江戸川柳と青砥藤綱」（『川柳学』二（四）二〇〇六年秋）等が挙げられる。

(5) 管見の限り、藤綱像に関する全面的な研究は筆者の修士論文『青砥藤綱像の変容からみた寛政期の「鑑」―文学上の人物の思想史的解釈をめぐって』（一橋大学大学院社会学研究科、二〇一五年）以外はない。修士論文では寛政期までの藤綱像を詳細に検証してきたが、寛政期以降の詳細な論考を博士論文の課題とした。

(6) 井上泰至『近世刊行軍書論』（笠間書院、二〇一四）。

(7) 井上泰至「近世刊行軍書と『武家義理物語』―青砥説話の生成と展開」（第四〇回「西鶴研究会」口頭発表　二〇一五年三月二六日　青山学院大学）。

(8) 拙稿「黄表紙の批判性の再考―青砥藤綱像を使用する寛政年間の黄表紙の特徴をめぐって」『第三八回国際日本文学研究集会会議録』（人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇一五年）四六～六〇頁。

(9) 延文五（一三六〇）年に仁木義長が没落し、吉野にこもった宮方が蜂起する。建武中興が失敗してから三十年間内乱は続き、吉野に伺候していた日野の僧正頼意は、宿願のことがあって北野の聖廟に通夜の参籠をしに出掛けた。この時に彼は、三人の人物が夜通し、古今東西、異国本朝の逸話を引きながら、現実の乱世を題材にして政談をするのを聞いた。それをまとめたのが「北野通夜物語」である。

(10) 『太平記』からの引用は、『太平記』一～三（『日本古典文学大系』、岩波書店、一九六〇～六三）による。

(11) 佐藤弘夫『神・仏・王権の中世』（法蔵館、一九九八年）。

(12) 中西達治「北野通夜物語ノート―太平記の思想的背景について」（『日本文学研究資料叢書　戦記文学』有精堂、一九七四年）、二四八頁。

(13) 小秋元段「因果論の位相―『太平記』巻三十五「北野通夜物語」論序説」（『論集太平記の時代』長谷川端編著、新典社、二〇〇四年）、一三九～一四〇頁。

(14) 北条時章（一二四七年七月～一二七二年二月）、二階堂行久（一二四九年七月～一二六一年三月）、北条実時（一二五三年二月～一二七六年十月）、北条長時（一二五六年六月～一二五六年十一月）。

(15)『新編武蔵風土記稿』巻二三、（間宮士信、文政十三年〈一八三〇〉）葛飾郡巻の四。

(16)『増訂豆州志稿』一三巻（萩原正平、一八八八年～一八九五年）四四頁。寛政一二（一八〇〇）年に編纂された『豆州志稿』の増訂版である。

(17)『増訂豆州志稿』一二巻、三七頁。

(18) 田中誠「康永三年における室町幕府引付方改編について」（『立命館文學』六二四号、立命館大学人文学会、二〇一二年）、七一四頁。

(19) 山崎美成が、文政三（一八二〇）年六月から天保八（一八三七）年二月にかけて作成したもの。『海録』からの引用は『海録』（早川純三郎編、国書刊行会、一九一五年）による。

(20) 平田俊『吉野時代の研究』（山一書房、一九四三年）、六六一頁、七一五頁。

(21) そもそも、「北野参詣人政道雑談事」と呼ばれた第三十五巻はいつしか独立し、流布本では「北野通夜物語」になっていた。長谷川端　注(13)、前掲書、二頁。つまり、本来「物語」ではなく「政談」であったことから、作者が意図していたことと、後世の受容とが異なっていることが推測される。

(22) 京都北野社は、当時、民衆の毘沙門信仰の中心とされる場所であったので、政治批判を人民の立場から捉えようとしたという指摘が興味深い。長谷川端　注(13)、前掲書、一一頁。

(23) 久須本文雄『日本中世禅林の儒学』（山喜房佛書林、一九九二年）、二五頁。

(24) 貞享二年（一六八五）に刊行、全八巻一二冊。水戸藩主の徳川光圀が彰考館員の河井恒久らに命じて編纂した鎌倉の地誌。本論文では、大日本地誌大系〈二十一〉の『新編鎌倉志』（雄山閣、一九五八年）より引用する。

(25)『新編鎌倉志』巻之六においては、片瀬川の記事に、牛の尿に関する揶揄のエピソードを載せて、「【鎌倉大日記】に、正嘉元年十月に、青砥左衛門藤綱召出さる。政治補佐の為なり」とある。このことから、『新編鎌倉志』は『理尽鈔』の影響を受けたものと見て取れる。

(26) 若尾政希『「太平記読み」の時代―近世政治思想史の構想』（平凡社、一九九九年）。

(27)「北野通夜物語」三十五巻末。高知県立図書館山内文庫蔵本（国文学資料館のマイクロフィルム）巻三五を使用

する。

(28)『理尽鈔』以来の『太平記』評判は四つの語り口に分類できる。「解・追解」(注)、「伝」(増幅)、「評判」(教訓)、「通考」(類和)。中村幸彦「太平記の講釈師たち」(『中村幸彦著述集』第一〇巻、中央公論社、一九八三年)百二二頁。

(29)原文には「食」に「量」とある。

(30)『蕃山全集』(正宗敦夫編、一九七九年)の第三巻「中庸小解」上巻、一〇頁。

(31)著者は浅井了意か。延宝三(一六七五)年初版刊行。『北条九代記』からの引用は、物語日本史大系『源平盛衰記・北條九代記』〈四〉(早稲田大学出版部、一九二八年)による。

(32)井上泰至　注(6)、前掲書、八八頁。

(33)例えば『弘長記』(弘長元〈一二六一〉年の日付が付されているが、内容を踏まえると、その日付はおそらく後世の偽りであったことが推測される)。『和論語』(沢田喜太郎源内作か。寛文九〈一六六九〉年版)、『武家義理物語』(井原西鶴、元禄一〈一六八八〉年版、浮世草子)、『北条時頼記／鎌倉西明寺殿』(岡本一抱、元禄四〈一六九二〉年版、浮世草子)『駿臺雑話』(室鳩巣、寛延三(一七五〇)年序、巻之四)、『滑川談』(塚田多門(大峰)、寛政三(一七九一)年跋)など。

(34)『町人嚢』(西川如見、享保四〈一七一九〉年版)、『都鄙問答』(石田梅岩、元文四(一七三九)年版)『四民善訓』(牧埜利道著、堀野屋仁兵衛、上總屋利兵衛、寛政六(一七九四)年、農民のための教訓)等が挙げられる。

(35)『摂州合邦辻』(菅専助作、安永二〈一七七三〉年二月、大阪にて初演)、『端手姿鎌倉文談』(菅専助作、浄瑠璃、安永六〈一七七七〉年初演)、『鎌倉比事青砥銭』(菅専助作、浄瑠璃、寛政元〈一七八九〉年八月、大阪此太夫座初演、別名〈有職鎌倉山〉)、『三鱗青砥銭』(富川吟雪作、青本、明和元〈一七六四〉年)などがある。